



りんご

黒星病・カラマツ多い。品質を見極め、早い摘果を心がけましょう。黒星病の発生が見られます。被害葉・被害果は見つけ次第摘み取り、二次感染源防止につとめましょう。

地域や園地によっては中心果の結実や果実形質にバラツキが見られます。仕上げ摘果はていねいに、早めの作業を心がけましょう。

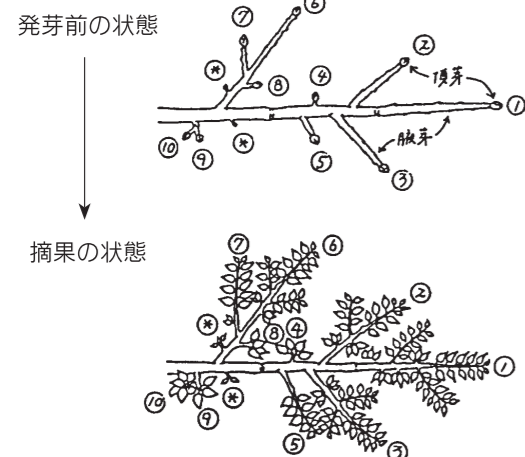
○摘果のポイント

- 障害果の発生が懸念されるため、肥大の良い果実を多く残すようにし、仕上げ摘果、見直し摘果で、より一層の品質の見極めと適正着果を行う。
- 逆さ実や肥大が劣るもの、品質が悪い果実は摘果する。
- カラマツが多い場合や着果量が不足している園地では側果や遅れ花果でも利用するが、その中でも肥大が進んでいる果実を残すようにする。

品種別摘果の強さ

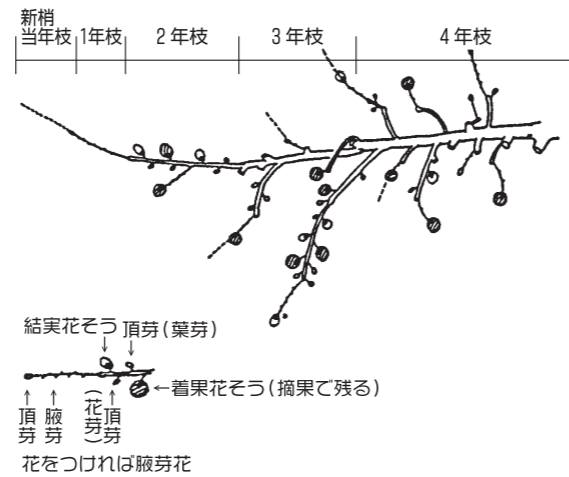
品 種	摘果の強さ (残す果実)	成らせ方の目安 (直径2cmの水平枝)
紅 玉	3頂芽に1果	15~16果
つがる・ ジョナゴールド	3.5頂芽に1果	12~13果
ふじ・王林・ 早生ふじ・ さんさ・未希ラ イフ・きおう ・トキ・金星	4頂芽に1果	11~12果
北 斗・ デリシャス系	4.5頂芽に1果	10~11果
陸奥・世界一	5頂芽に1果	8~9果

○頂芽の数え方



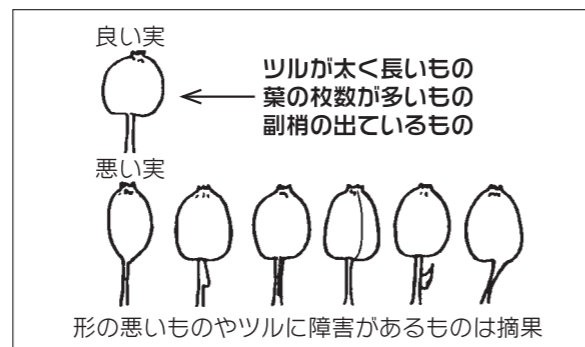
※ 著しく生育不良の芽は頂芽として数えない。

○枝齢、頂芽、着果の状況

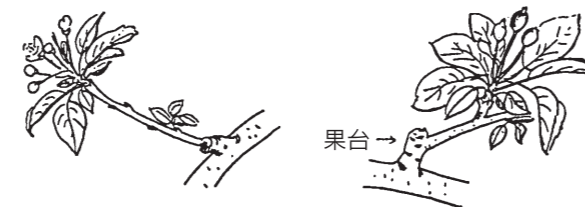


高品質、良品生産のためのチェックポイント

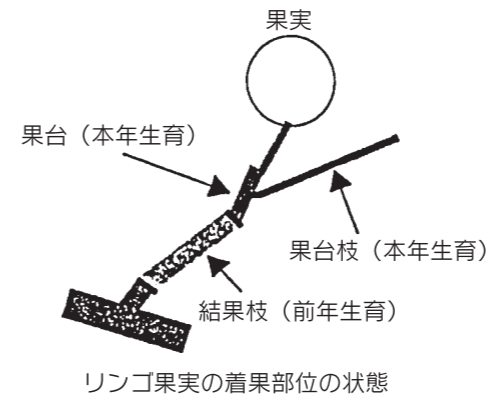
- ① 中心果で果そう葉が多いか
副梢(20cm程度以下)がでていないもの。
副梢が伸びすぎているものは敬遠すること。
- ② 果形が整っているか
正形なものは5つの部屋すべてに種が入っている。
- ③ 果枝の長さは中果枝を中心となっているか
・ 5~15cmの短、中果枝を中心にならせる。
・ 短果枝を使う場合は、副梢が出て、果そう葉の多いもの。
・ 長果枝は20cmくらいまで。
- ④ つるもとの窪み(梗あ形成)が良好か
- ⑤ つる(果柄)が太く、長い
- ⑥ 果台が長すぎないか
・ 良品生産には果台長が1.0~1.5cmが適する。
・ 2cm以上のものは、生育途中で肥大が鈍り、品質が劣る。(オドゴリンゴ)
- ⑦ 果実同士の間隔がとれているか
・ 果実間で養分の競合がある。
・ 収穫時にぶつからないようにぎりぎりこぶし以上の間隔をとる。



肥大良好になる中・長果枝



副梢又は果台枝の中果枝(6~10cm)や長果枝(11~20cm)の果実は肥大も良く、形も良い。短果枝(0.6~5cm)の果実も葉数の多いものは成らせてよい。



追肥

追肥をする場合は6月末までに施す。着果量に合わせて、適宜加減する。着果量の少ない樹では追肥を控える。

苗木や若木への灌水

園地の土が乾燥していることから、今年植付した苗木は衰弱することが予想されるので降雨がない場合は定期的に灌水する。

徒長枝・ひこばえ(根バヤ)の剪去

ナミハダニ越冬密度の高い園地では5月下旬頃からひこばえ(根バヤ)や主枝・垂主枝など大枝から発生している徒長枝葉に多く寄生しているため不要な徒長枝やひこばえ(根バヤ)は剪去する。

カイガラムシ防除

クワコナカイガラムシが多い園地では、バンド巻きの実施。越冬世代成虫の産卵前(6月下旬)に巻き付け、第1世代のふ化前(7月中旬)に除去して焼却する。

方法としては、垂主枝などの大枝に幅15~20cm程度のダンボールを一周程度きっちりと巻いて、虫の潜伏・産卵場所を与える。その後、7月中旬に除去する。

取り外す時期を失すると、むしろ増やす結果になるので必ず取る。

斑点性障害(ビターピット)の防止

開花量が少ない樹は樹勢が強い傾向にあり、斑点性障害(ビターピット)の発生が心配されます。斑点性障害防止のために高濃度のカルシウム剤を10日以上の間隔で3~5回果面散布する。

カルシウム剤の使用法

品 名	規格	1,000ℓ当たりの 使用量(倍数)
スイカル	1kg	3kg (333倍)
セルバイン	1.25kg	2.5kg (400倍)
カルハード	500ml	1ℓ (1,000倍)
ストピットII	2kg	2kg (500倍)

袋かけの時期

袋かけは7月上旬までに終わるようにする。また、すす病が毎年発生している園地では、薬剤散布後5日以内を目安に袋をかけること。これ以上遅れる場合は実洗いをしてから袋をかける。

腐らん病対策

枝腐らんは見つけ次第、切り取って処分する。胴腐らんは見つけ次第、泥巻きをするか、削り取りを適正に行い、塗布剤を塗る。効果の確認されていない方法では治療しない。

モモシクイガ被害果処理

モモシクイガの被害果は見つけ次第採取し、7日間以上水に漬けるか、穴を掘り10cm以上の土をかぶせて埋める。被害果をそのまま放置すると次世代の発生源となるので、必ず処分する。

これからの薬剤散布

通常防除 (防除暦のとおり)

(6月19日~21日頃)

○ ぶじの落花40日後頃

1. 展着剤
2. アントラコール水和剤 500倍
3. モスピラン顆粒水和剤 4,000倍
4. クレミクス 333倍
又はバイカルティ 1,000倍

(7月1日~2日頃)

○ 7月初め

1. 展着剤
2. 有機銅水和剤(80) 1,200倍
3. サイハロン水和剤 2,000倍
4. ダニサラバフロアブル 1,000倍

(7月15日~16日頃)

○ 7月半ば

1. 展着剤
2. 有機銅水和剤(80) 1,200倍
3. ベンレート水和剤 3,000倍
又はトップジンM水和剤 1,500倍
4. フェニックスフロアブル 4,000倍
又はサムコフロアブル 5,000倍

アブラムシ類対策

7月にアブラムシが発生した場合はウララ4,000倍、コルト6,000倍、キラップ4,000倍のいずれかを加用する。

りんご栽培日誌 (栽培履歴)の記帳の徹底

いつ・どこの園地に・何の農薬を・何倍で・何リットル散布したか、必ず栽培日誌に記帳してください。

●水稲

カメムシ被害を防ぐため、草刈をしっかり行いましょう!!

▼水管理

生育時期	寒い日	暖かい日 (暑い)	備考
分けつ期	5～6cm	3cm	分けつは平均水温19℃以上
莖数確保後	5～6cm	中干し	中干しは幼穂形成期前に終える
幼穂形成期	10cm程度で10日間		障害不稔の発生は平均気温20℃以下、最低気温17℃以下

▼除草剤

水田雑草のノビエ・ホタルイ・シズイは、カメムシ類を誘引するので防除を徹底する。
雑草の取りこぼしの際は、中・後期剤を処理適期に散布する。

▼補植苗（取置苗）の処分

補植用として水田に放置している苗は、「いもち病」の感染源となります。直ちに処分しましょう。

▼病害虫防除

◇イネヒメハモグリバエ

発生が多い場合は、被害葉の発生初期に茎葉散布剤を散布する。薬剤は畦畔にも散布する。ただし、本虫に登録のある箱施用剤を使用した場合には、追加防除は不要。

◆茎葉散布

- スミチオン乳剤 … 2,500倍/80ℓ(10a)
- エルサン乳剤 … 1,500～2,000倍/80ℓ(10a)

◇イネドロオウムシ

本田発生が見られた場合防除を行う。

◆茎葉散布

- ダントツ粉剤DL …… 3kg/10a
- トレボン粉剤DL …… 3kg/10a

◇葉いもち病

例年、いもち病の発生が多い水田では、6月20日頃～6月末までにオリゼメート、オリプライトなどを水面施用する。

予防散布を行った場合でも葉いもちの発生が見られた場合は、4～5日毎に成分の異なる茎葉散布剤により追加防除を行い、穂いもちの伝染源となる上位葉での発病を抑えるよう努める。

◇カメムシ類

発生地となっている水田周辺の休耕田や畦畔などで、雑草が開花・結実しないように刈取りや耕起を行う。

▼追肥

追肥の判定は幼穂形成期（幼穂長2mm）を確認するとともに、葉色が各品種の追肥可能な状態まで低下したことを確認して行う。葉色は葉緑素計を用いると正確に確認できる。幼穂形成期後7～10日頃の時点でも葉色が濃い場合には、追肥を中止する。

各品種の追肥可能な葉色値（SPAD-502）

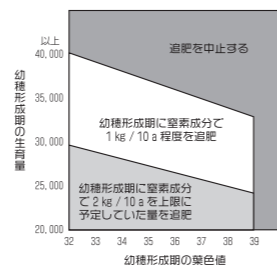
品種名	葉色値
つがるロマン	37～39
まっしぐら	34～36
青天の霹靂	39以下

「青天の霹靂」追肥のポイント

- ・「青天の霹靂」の幼穂形成期は「まっしぐら」並みです。
- ・幼穂形成期以降の追肥は、玄米タンパク質含有率が高くなるので、行わないこと。
- ・生育後半に土壤窒素発現量が多い水田は「無追肥」とする。
- ・追肥量は栄養診断基準を参考に決める。

【栄養診断基準】

生育指標 (幼穂期の草丈×m 当たり莖数×葉色値)	10a当たりの追肥 対応(窒素成分量)
95万未満	幼穂形成期に窒素成分で2kg/10aを上限に予定していた量を追肥
95万以上 129万未満	幼穂形成期に窒素成分で1kg/10a程度を追肥
129万以上	追肥を中止する



注：生育量は草丈×m当たり莖数で算出し、葉色値は葉緑素計で測定する。

「青天の霹靂」栽培日誌 1回目提出期限

6月30日(土)まで です!!

●トマト

活着促進

地温を15℃以上確保し、手灌水の際には、水圧で根を洗わないよう注意する。

浅根と低段着果対策

試し灌水は通常より3～5日早めに行い、追肥は遅くても3段果房開花始めから実施する。1～2段摘果実施。

摘果時期と成り果数

成り果数の判断 着果節位	樹勢	摘果時期	各花房段の成り果数(果)				1段花房の草勢と成り果数
			1段	2段	3段	4段～	
7・8葉の上	普通～強い	3段果房トマトン処理後	3	4	3	4・3果交互の繰り返し	草勢の強弱によって1果増減
5・6葉の上	弱い	2段果房トマトン処理後	2	3	3		

徒長防止策として、換気の徹底と最低気温14℃以上で夜間ハウスの開放。

ガク枯れ時は、アミグロー（500倍）の葉面散布実施。

●大豆

中耕・培土

中耕は、播種後3～4週間頃から実施し、培土の1回目（本葉1.5～2葉期）に初生葉の付け根まで、2回目（本葉3～5葉期）は、第1葉期の付け根まで土寄せする。

除草剤

中耕・培土で除草対応しきれないほ場では、生育期に除草剤で対応する。

- イネ科雑草：ポルトフロアブル（イネ科雑草3～8葉期）
- 一年生広葉雑草：大豆バサグラン液剤（大豆2葉期～開花前）
※葉害が生じるので十分確認してから使用する。
- 一年草雑草：バスタ液剤（畦間処理：収穫28日まで）

●ねぎ

活着促進

強風や干ばつが続く乾燥するとほ場の肥料を吸い上げできない状態のねぎが見られるため、まずは、灌水作業を行い2～3日様子を見てから追肥の可否を判断する。

- 追肥S646 → 20kg/10a
- 葉面散布：メリット青 → 300～400倍
定植後30日を過ぎると生育は急激に旺盛となり、新葉が伸びてくるため、肥料のやり過ぎは葉折れの原因となるので注意する。

「活着不良や乾燥で根痛みしたら・・・」

亜リン酸資材の活用で早期に発根を促進する。

- トップスコア・リン → 1,000～2,000倍

●メロン

定植後の管理

- ①定植後の温度管理は、トンネル内の温度を30℃以上に上げないよう適時に両側か片側を判断し換気する。
メロン苗に直接的に風が当たらないよう注意して換気する。
- ②整枝は2本仕立てで、2～3回に分けて行い、孫づるは着果節位の手前まで、開花3日前までに終了する。
- ③灌水は、着果後10日頃（果実の初期肥大期）までに2～3回、硬化期を除いて適時行う。

摘果とマット敷き

摘果は鶏卵大（着果7～10日）の頃に行い、果形の整った素質のよい果実を残す。
摘果期を逃し、摘果作業が遅れると、果実の急速な肥大期に入り、株に大きな負担がかかる。
また、この時期の摘果は、果皮が柔らかく非常に傷つきやすいので、丁寧に作業を行う。
マット敷きは、着果後15日頃までに終わるようにする。

温度管理

果実肥大期には、最低温度を15～18℃とする。
また、ネット発生時期は、14～15℃の低温管理とし、さらにトンネル内の風通しを良くする。ただし極端にトンネルを開けると、ネットが良くはならないため注意する。

病害虫防除

アブラムシ類、つる枯れ病等の早期発見に努め、防除を徹底する。又、つる枯れ病の株は、土中で根が傷つき周りが感染していくため、むやみに抜きとらないこと。

灌水

硬化期（着果後10～15日）を除いて肥大期に雨量が少ない場合は、1株当たり5リットル程度の灌水を行う。
メロンは水で太ります！

● スイカ

低温により生育が遅れている場合には、葉面散布を実施する。

定植後の管理

- ①定植後の温度管理は、トンネル内の温度を30℃前後に保つようにする。活着後から第1回目の整枝まで片側換気とし、その後から両側換気にする。
 - ②整枝は、親づるの葉数4～5枚で止め、揃った子づるを3本残す。孫づるを株元へ引っ張りながら、着果節位20節前後まで、2～3回に分けてかき取る。
この作業は、開花3日前までに終了する。
- ※小玉すいかは、定植から14日前後に次の1～3までの作業を同時に行う。
1. 親づるの葉を10～12枚残し、摘心する。
 2. 4～5節までの長い子づるを除去する。
 3. 株元の細かい芽をきれいに除去する。
すると、親づるの摘心から8日後に子づるがきれいに揃う。
- ③孫づるの芽かきが終了したらダコニール1000の1000倍液かジマンダイセンの600倍液を散布する。
 - ④交配は着果率を高めるため花卉を取っての人工交配とする。
交配日は確実に書きとめ、覚えておく。
着果棒を立てる場合は、花の咲いた日を目安に色分けをする。熟期のバラつきが大きくなるため着果後に玉の大きさで立てるのは避ける。

雌花の充実を良くするために、開花2～3日前より温度確保に努める。(夜温で15℃以上)

※黒皮のブラックジャックについては、他の普通品種のすいかの雄花でなければ着果しないので気をつけること。

灌水

着果(鶏卵大)を確認したら、天候を考慮しながら、1㎡当たり4～5リットルの灌水を着果後30日頃まで、3日に1回行う。その後は、徐々に節水管理し、特に収穫前1週間位は水をきり糖度を高めるようにする。

温度管理

30℃を目安に温度管理をし、玉の肥大を図る。

日中32℃以上が続くようであれば遮光資材やわら等で高温対策を行う。

標識棒立てと玉直し

ある程度玉が肥大したら、標識棒を立て、玉を縦や横にして、2～3回玉直しを繰り返す。

摘果

1株に1果の基本を守り、糖度上昇、玉肥大に努める。

小玉すいかは1株から3～5果を目標にする。

防除

つる引き時に終了し、着果後バレーボール大になったら行う。

着果時からバレーボール大以前に行うと、玉の肥大が悪くなる。

